

【文献】

- 1) Sander F. G., Lassak Ch.: Die Beeinflussung des Wachstums mit der Vorschubdoppelplatte im Vergleich zu anderen funktionskieferorthopadischen Geraten. Fortschr. Kieferorthop, 51: 155-164, 1990

P-6 発育期における反対咬合に対する舌位置に注目した新しい矯正装置の考案

(尾張矯正歯科)

梶 敬太・渡邊 崇

【目的】発育期の反対咬合を対象とした機能的矯正装置の報告の中で、舌位の改善を主目的とした装置はあまりない。我々は舌位とその機能を正しく獲得することを目的とした可撤式機能的矯正装置 Rising Tongue Trainer (以下:RTT)を考案したので報告する。

【対象と方法】尾張矯正歯科を受診され、同意を得た低位舌を伴う反対咬合の患者54名(平均年齢:7歳4か月)を対象とした。方法は治療前後の評価を側方頭部エックス線規格写真やCBCTを用いて舌位、舌骨、咽頭容積の評価も行った。

【結果】被蓋改善期間は、平均3.1か月であった。

治療前後の評価として、over jet, over bite, SNA, ANB, Wit's, Kix, naso-labial angle, U-1 toFH, 上下顎犬歯間幅径, S-H, C3-H, PSVは有意に大きい値を示した。facial axis, occlusal plane, interincisal angle, E-line, NSH, T-P, H-Hは有意に小さい値を示した。

T-Pの改善有無についてはnaso-labial angleやNSHではT-P改善有群が改善無群と比べ、有意に小さい値を示した。facial axisではT-P改善有群が改善無群と比べ、有意に大きい値を示した。

【考察および結論】RTTは前後的骨格的には、上顎骨の前方位を認め、垂直的にはfacial axisは時計回りを示し、occlusal planeは平坦化した。歯性では良好な歯軸関係を獲得できた。舌骨は治療前と比較して、上前方位に変化し、咽頭腔体積(PSV)は増加した。また上下顎犬歯間幅径は共に拡大した。RTTは舌位を積極的に改善させるデザインより、早期に咬合および機能を改善し、反対咬合改善の一助となる装置であると思われた。

P-7 第二大臼歯萌出位置異常の発現頻度について

(朝日大・歯・小児歯)

渡邊 寛子・宋本 政文・森 榮
鈴木あゆみ・佐野 祥美・倉橋 実里
近藤 裕子・飯沼 光生・田村 康夫

【目的】永久歯の萌出位置異常は前歯部、犬歯が多く、次いで大臼歯部にもみられる。前歯部萌出位置異常の原因は外傷や過剰歯、歯牙腫の存在などが多いのに対し、大臼歯部の位置異常の原因は顎骨の矮小化などによるアペイラブルアーチレングスの不足も挙げられ、特に日本人の多くは短頭型であるため、第三大臼歯があると大臼歯部に影響を受けやすいと考えられる。そこで、今回我々は、第二大臼歯萌出位置異常の発現頻度を明らかにすることを目的に、調査を行った。

【方法】対象は高等学校3校の1~3年生2,535名である。学校歯科健診において第二大臼歯の萌出状態を検診した。

検査方法は、歯列弓上にある第一大臼歯を基準とし、上顎は第一大臼歯の遠心頬側咬頭から第二大臼歯の近心頬側咬頭が3mm以上頬側に萌出しているものを頬側傾斜とした。また、下顎は第一大臼歯の遠心舌側咬頭から第二大臼歯の近心舌側咬頭が3mm以上舌側に萌出したものを舌側傾斜とした。さらに、交叉咬合は咬頭嵌合位において上下顎の歯列弓が相互に交叉して咬合した状態をいい、鋏状咬合は咬頭嵌合位において対合する臼歯が咬合面で対合せず、上顎舌側咬頭と下顎頬側咬頭の外斜面同士がすれ違って咬合している状態とした。

【結果】2,535名のうち上顎第二大臼歯が頬側に萌出している者が右側23名(0.91%)、左側23名(0.91%)であり、下顎第二大臼歯が舌側に萌出している者が右側67名(2.64%)、左側51名(2.01%)であった。咬合に関しては、鋏状咬合が31名(1.22%)、交叉咬合が19名(0.75%)であった。

【考察】交叉咬合や鋏状咬合等は、咀嚼機能の異常をきたすと共にう蝕や歯周疾患等の原因ともなることから、治療が必要となる。しかし、学校歯科健診では指摘されることが少なく、今後大臼歯の萌出状態も慎重に観察することが必要であると考えられる。